

「西方の人」の運命と美（その四）

高田 瑞穂

(五) 「ジャアナリスト」と「孤身」

「我々は唯我々自身に近いものの外は見ることには出来ない。少くとも我々に迫つて来るものは我々自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジャアナリストのやうにこの事実を直覚してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人——彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずには済ましたことはない。『善いサマリヤ人』や『放蕩息子の帰宅』はかう云ふ彼の詩の傑作である。」

「西方の人」第十九章「ジャアナリスト」前半において

て、芥川はこう告げる。これに、第二十二章「詩人」の冒頭の一句を重ねると、「ジャアナリスト」ということばによつて指し示されている芥川の内的風景もほぼ明らかとなるであらう。

「クリストは一本の百合の花を『ソロモンの栄華の極みの時』よりも美しいと感じてゐる。」

自らをしばしば「詩人兼ジャアナリスト」と呼んだ芥川は、ここにも、クリストの内に自らの影を——むしろ自らの内にクリストの影をと言うべきであらう——見続けていたにちがいない。だが、何時如何なる時においても、ジャアナリズムは、単に「一本の百合の花」の美に酔う詩人を

詩人として認められたであろうか。芥川もそのことは知り過ぎるほど知っていた。

「クリストはこの神の為に——詩的正義の為に戦ひつづけた。」（『西方の人』第二十章「エホバ」）

「しかしクリストは彼自身も『善き者』でないことを知りながら、詩的正義の為に戦ひつづけた。」（『続西方の人』第九章「クリストの確信」）

「詩的正義」とは「神」の心に他ならなかった。そうだとしたら、クリストのシヤアナリズムとは、神への道の開拓である。「かう云ふ彼の詩の傑作」と芥川のいうものに、先ず目を向ける必要がある。

「善いサマリヤ人」は、「ヨハネによる福音書」第四章に登場する。ユダヤを去って再びガリラヤへ向ったイエスは、孤立した丘の上のサマリヤを通らなければならなかった。イエスはスカルという町に行った。

「この町は、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにあったが、そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れを覚えて、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた。時は昼の十二時ごろであった。ひとりのサマリヤの女が水をくみにきたので、イエスはこの女に、

『水を飲ませて下さい』と言われた。」

ここから、イエスと「サマリヤの女」との間の、劇的といつていい会話が展開する。芥川がある詩的感動を受けたことも想像に難くない。

イエス「女よ、わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが、この山でも、またエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。あなたがたは自分の知らないものを拝んでいるが、わたしたちは知っている方を礼拝している。救はユダヤ人から来るからである。しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このよきな礼拝をする者たちを求めておられるからである。」

サマリヤの女「わたしは、キリストと呼ばれるメシアがこられることを知っています。そのかたがこられたならば、わたしたちに、いっさいのことを知らせて下さるでしょう。」

イエス「あなたと話をしているこのわたしが、それである。」

芥川という「放蕩息子の帰宅」は、「ルカによる福音書」第十五章に記されている。しかしそれは現実の事としてで

はなく、キリストのことばとしてである。ある安息日、パリサイ派のかしらの一人の家に招かれ、招かれた客たちが上座を争っている様子を見て、「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであらう。」と説いたことを口火として、この日のイエスは、次第に大ぜいの群衆にかこまれ、殊に取税人や罪人たちにまで近寄られて、長い説話を続けたのであった。それは、解りやすい譬え話であった。その中の一つの話が「放蕩息子の帰宅」であった。

「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください。』そこで、父はその身代をふたりに分けてやった。」

イエスの、この話は、こういう設定に始まる。数日後に「遠い所」へ去り、「放蕩に身を持ちくずし」て、すべての財産を使い果たした弟は、たまたまその地方を襲った「ひどいききん」にも攻められて、「豚の食べるいなご豆で腹を満たしたい」と思うが、それすら許されないと貧困のどん底に落ちた。そのとき、彼は「本心」に立ちかえった。そして父のもとに帰る決心をする。イエスのことばを

聞こう。

「そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみるとめ、哀れに思つて走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかつて、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません。』しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。それから祝宴がはじまった。』」

イエスの教えは、この譬え話に関する限り、ここまでで一応完結する。しかし、もう一つの教訓が加えられる。それは、如上の父の態度に反感を禁じ得なかつた兄に対する父の答えに暗示されるものであった。

「兄は父にむかつて言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかつたのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さ

ったことはありません。それなのに、遊女どもと一緒に
なって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が
帰ってくると、そのために肥えた子牛をほふりなさいま
した。すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわた
しと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのもの
のだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き
返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び
祝うのはあたりまえである。』

こういうイエスの話しを聞いてペテロが、「主よこの譬
を話しておられるのはわたしたちのためのですか、それ
とも、みんなのためのですか。」と尋ねる。イエスは「わ
たしたち」と「みんな」との双方に向けて激しく教える。

「わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。」

「なぜ正しいことを自分で判断しないのか。」

芥川がクリストにおける「彼の詩の傑作」と見たもの
が、ともに極めて文学的であることは、当然であったであ
ろう。ここでも、芥川は、表現するものとしての自己を、
クリストの内に投影している。だからこそ、そういうクリ
ストに、「ジャアナリスト」に不可避の感慨「孤心」を見
出ださずにはいられなかったのであろう。

『イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひし
が隠れ得ざりき。』——かう云ふマコの言葉は又他の伝
記作者の言葉である。』

「続西方の人」第十四章「孤身」はこういうことばに始
まる。芥川が、自らの内なるものを、存分にクリスト——
むしろクリスト達と言うべきである——に投げかけたもの
の典型をここに見ることが出来る。その後半を引こう。

「けれどもジャアナリストとなつた後、彼の孤身を愛
したのは疑ひのない事実である。トルストイは彼の死ぬ
時に『世界中に苦しんでゐる人々は沢山ある。それをな
ぜわたしばかり大騒ぎをするのか?』と言つた。この名
声の高まると共に自ら安じない心もちは我々にも決して
ない訳ではない。クリストは名高いジャアナリストにな
つた。しかし時々大工の子だつた昔を懐がつてゐたかも
知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをファウスト自身に
語らせてゐる。ファウストの第二部の第一幕は実にこの
吐息の作つたものと言つても善い。が、ファウストは幸
ひにも艸花の咲いた山の上に行んでゐた。……」

「ファウスト」第二部第一幕の冒頭は「幽邃な土地」(以
下大山定一氏訳による)、そこでのファウストの登場は、

先ず、次のような詞書によって規定される。

「ファウスト、花の咲いた草原にねている。疲れはてて、たえず身をうごかしながら、眠りをもとめる。

日ぐれ。

妖精の群、漂うように飛びまわる。やさしい小さな姿で。」

そういうファウストの上に、すべての人間を救おうとする自然の妖精たちの首長アリエルの声がひびく。

「あたまの上を空いっばいに飛びまわる妖精たちよ、気高いいつものやり方で、この男をなぐさめてやれ。

心のおそろしいもだえをやわらげ、

灼けつくような非難のするどい矢を抜きとり、

胸に受けた恐怖のきずあとを洗ってやれ。」

そして新しい朝が、フェーブスの戦車のひびきとともに訪れる。ファウストは立ち上ろうとする。

「生命の脈搏がよみがえったようにまたいきいきと打ちはじめ、

やさしく大気のはのあかりに挨拶をおくる。

大地よ、おまえは昨夜もふだんのように変わらぬ堅固な存在をつづけた。

そして今朝は、新しく元気にみちあふれて、おれの足下に息つき、

ふたたび歓喜をもっておれのまわりを取りかこもうとする。

おまえは最高の存在を目ざしてたゆみなく努力をつづける人間の力づよい決意を鼓舞し促す。——」

ファウストの困憊の根源が、「最高の存在を目ざしてたゆみなく努力をつづける」ことの中にあつたこと、換言すれば、ファウストが「永遠に超えんとするもの」の宿命の中にあつたことは、改めて言うまでもないであろう。そういう根深い根源を、今芥川は、「クリストは名高いジャアナリストになつた」という現象に即して考えようとする。

そうすると、おのずから、クリストの困憊は「大工の子だつた昔」を思う心情に彼を導く。こういう芥川の「孤身」の想いに内在する二つのもの、それは必ずしも矛盾ではないが、調和でないことも明らかだ。二つのものは、次第にわれわれの内にもある共感を伝えずにはいない。その一は、「人に知られざらん事を願ふ」心情、他は、「更に人に知られん事を願ふ」心情である。ジャアナリストの「孤身」への執着が、単に自らを人の群れから孤立したものにしたい

というだけであつたとしたら、簡単である。彼は口を閉じ、筆を捨てればよい。彼の願いが彼の中に生動を保つ所以は、もともと彼が「名高いジャアナリスト」であつたからである。だからこそ彼は、いよいよ「孤身」を思い、いよいよ「名高いジャアナリスト」であることを願うのである。「永遠に超えんとするもの」の宿命の影は、ここにも明らかである。晩年の芥川が、一面において素朴な生を慕いつつ、他面、必死の筆をふるい続けたことは周知のことに属する。

「少くとも僕はジャアナリストだつた。今日もなほジャアナリストである。将来も勿論ジャアナリストであらう。

しかし諸大家たちは暫く問はず、僕はこのジャアナリストたる天職にも時々うんざりすることは事実である。」昭和二年二月に書かれた「文芸的な、余りに文芸的な」第二十章「ジャアナリズム」の一節である。「時々うんざりすることは事実」であつたにちがいない。しかし、そういう「時々」を持ったこと自体には問題はない。そういう「時々」が「ジャアナリスト」という天職の再確認の「時々」であつてはじめて真正の「ジャアナリスト」であるべ

きである。晩年の芥川の「うんざり」は、明らかに相互媒介的であるよりは、内部分裂的であつた。だからこそ、自らの生を回想して「或阿呆の一生」と言わなければならなかつた芥川であつた。そのとき芥川は自らを「阿呆」と断じつつ、自らは絶対に「阿呆」ではないと言ひたかつたにちがいない。そういう晩年の芥川に、「ジャアナリスト」の典型のイメージを与えたのが、クリストだつたのである。「統西方の人」第六章「ジャアナリズム至上主義者」の全文を引こう。生命をかけて自らの内に樹立したかつたイメージであつたにちがいない。

「クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジャアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、彼は大きい無花果のかけに年とつた予言者になつてゐたであらう。平和はその時にはクリストの上にも下つて来たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる妥協のもとに微笑してゐたであらう。しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を与へてくれなかつた。それは受難の名を与へられてゐても、正に彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の為に永久に若々しい顔をしてゐるのである。」

クリストにおける運命と美との完全調和——芥川の眼がそれを捕えた一瞬、恐らくその眼中に熱いものが湧き上ったにちがいない。

(六) 「イエルサレムへ」の運命

「クリストは高い山の上に彼の為に生まれたクリストたち——モオゼやエリヤと話をした。」

第二十五章「天に近い山の上の問答」はこういうことに始まる。既にクリストは「その何日か前に彼の弟子たちにイエルサレムへ行き、十字架にかかることを予言してゐた」のであった。それは言うまでもなく、自らの宿命の自覚であった。宿命とは、常に、自らの生の極限の先取である。そして、それがどういふ状況に到達し得たにしても、極限の先取を彩るものは絶望と慟哭とであるであらう。何故なら、一切の生の極限は死につながるからである。芥川自らの場合も、「人の子」クリストの場合も、そうであった。「彼のモオゼやエリヤと会つたのは彼の或精神的危機に待んでゐた証拠である。」と記し、その断定を更に不動のものたらしめるために、「彼は彼の一生の中でも最もこ

の時は厳肅だつた。」と説く芥川であつた。芥川をしてそう感得せしめた根拠も、勿論、無いわけではない。この時のクリストの顔は「日の如く輝き其衣は白く光」つたと、『マタイによる福音書』の一節も引用されている。しかし、芥川がこの章で告げたかつたことは、明らかに、クリストにおける宿命の自覚と、そのことにまつわる心奥の苦しみとであつた。

「彼の伝記作者は彼等の間の問答を記録に残してゐない。しかし彼の投げつけた問は『我等は如何に生くべき乎』である。クリストの一生は短かつたであらう。が、彼はこの時に、——やつと三十歳に及んだ時に彼の一生の総決算をしなければならぬ苦しみを嘗めてゐた。」そのクリストの苦しみに、ある情調ないし色彩を与えたものは、「下界の人生」への懐しみであつた。これが、クリストに託して告げられた芥川自身の心情であつたことは言うまでもない。

「クリストは彼等と問答しながら、愈彼の見苦しい死の近づいたのを感じずにはゐられなかつた。天に近い山の上には水のやうに澄んだ日の光の中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には柘榴や無花果も

句つてゐたであらう。そこには又家々の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懐しきを感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも応でも人氣のない天に向つてゐる。」

「永遠に超えんとするもの」の宿命の自覚は、最早クリストの内に、すなわち芥川自身の内に、不動のものとなつた。芥川はクリストとともに「イエエルサレムへ」行かなければならない。

第二十七章「イエエルサレムへ」は、そういうクリストへの錯雜した感慨の記述である。

「クリストは一代の予言者になつた。同時に又彼自身の中の予言者は、——或は彼を生んだ聖靈はおのづから彼を翻弄し出した。我々は蠟燭の火に焼かれる蛾の中に、も彼を感じるであらう。蛾は唯蛾の一匹に生まれた為に蠟燭の火に焼かれるのである。クリストも亦蛾と變ることはない。」

「蛾と變ることはない」のが、果してクリストであつたであろうか。それはむしろ、芥川自身により近接した表白であつた。大正後半期文壇の星となつた作家芥川竜之介

は、同時に彼自身の中の詩的精神によつて翻弄されなければならなかつたのである。その晩年の諸作、殊に昭和期のそれは、「西方の人」をもこめて、芥川の最後の戦いであつた。クリストも、遂にイエエルサレムに入る。第二十八章「イエエルサレム」におけるクリストもまた、最後の戦いを戦う。それは究極において一個の天才の、個の戦いである。ほかはなかつたのである。

「クリストはイエエルサレムへはひつた後、彼の最後の戦ひをした。それは水々しさを欠いてゐたものの、何か激しさに満ちたものである。彼は道ばたの無花果を呪つた。しかもそれは無花果の彼の予期を裏切つて一つも実をつけてゐない為だつた。あらゆるものを慈んだ彼もここでは半ばヒステリックに彼の破壊力を揮つてゐる。

『カイゼルのものはカイゼルに返せ。』

『マタイによる福音書』によれば、第二十一章から第二十六章に及ぶクリストの「最後の戦ひ」の記述を通じて、芥川の内にも最も強い共鳴を引きおこしたものは、ゲッセマネにおけるクリストの孤立の姿であつた。『マタイによる福音書』第二十六章、『マルコによる福音書』第十四章、『ルカによる福音書』第二十二章に、それぞれ、そういう

クリストの悲しみは告げられている。しかし、私は芥川のことばを引く。第二十八章「イエルサレム」の末尾を見よう。

「ゲツセマネの橄欖はゴルゴタの十字架よりも悲壯である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、——彼自身の中の聖霊とも戦はうとした。ゴルゴタの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事実を知り悉してゐた。が、彼の弟子たちは、——ペテロさへ彼の心もちを理解することは出来なかつた。クリストの祈りは今日でも我々に迫る力を持つてゐる。——『わが父よ、若し出来るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。』

あらゆるクリストは人氣のない夜中に必ずかう祈つてゐる。同時に又あらゆるクリストの弟子たちは『いたく憂て死ぬばかり』な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐる。……」

芥川自身もまた、くりかえしくりかえして、夜中に祈つたにちがいない。

「若し出来るものならば、この杯を……」

しかし、クリストは「イエルサレムへ」行かねばならなかつた。芥川の「イエルサレム」はどこか。芥川はどこへ行かなければならなかつたのか。

(七) 「受難」と「復活」と

「続西方の人」第二十章「受難」における芥川の筆蹟には、明らかに一種嘲笑の影が落ちている。昭和二年七月二十三日に「続西方の人」を書き終えた芥川は、その翌二十四日未明に、世を去つたのである。「受難」に感得される嘲笑が、自らの手によって自らの生を断絶しなければならなかつた自己にそそがれたものであつたことは言うまでもない。しかし、クリストもその対象と全く無縁ではなかつた。

「十字架にかかつたクリストは多少の虚栄心を持つてゐたものの、彼の肉体的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊に十字架を見守つてゐたマリアを眺めることは苦しかつた訣である。が、彼は『エリ、エリ、ラマサバクタニ』と云ふ必死の声を挙げた後も（たとひそれは彼の愛する讚美歌の一節だつたにもせよ）彼の息

の絶える前には何かおほ声を発してゐた。」

その死に際して、芥川の内にも「多少の虚栄心」の在ったことは否定できない。そもそも「続西方の人」を綴ったこと自体が、そのことを告げている。次いで芥川は、「マタイの言葉によれば、『殿の幔上より下まで裂けて二つになり、又地震ひて岩裂け、墓ひらけて既に寝ねたる聖徒の身多く甦』つた。彼の死は確かに大勢の人々にかう云ふシヨツクを与へたであらう。」と記すが、芥川の筆調は明らかに、一の低下を示している。クリストの生涯の極点にふれる場において、単にマタイの言葉を引き、「シヨツクを与へたであらう」とだけしか言えない筈はない。これに比較すれば、「西方の人」第三十二章「ゴルゴダ」は、はるかに清澄な表現である。しかし、そこに感じられるものも感動ではなく、一種の批判である。その短い全文を引く。

「十字架の上のクリストは單に『人の子』に外ならなかつた。

『わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？』
勿論英雄崇拜者たちは彼の言葉を冷笑するであらう。

況や聖霊の子供たちでないものは唯彼の言葉の中に『自業自得』を見出すだけである。『エリ、エリ、ラマサバ

クタニ』は事実上クリストの悲鳴に過ぎない。しかしクリストはこの悲鳴の為に一層我々に近づいたのである。のみならず彼の一生の悲劇を一層現実的に教へてくれたのである。」

芥川の言おうとしていることは「続西方の人」の場合も同じである。そこに多少の相違があるとしたら、後者に感じられる一種の切迫感——死への切迫感であらう。「受難」の後半における芥川は、「パヒニの詩的情熱」に無用の反撥を示し、次いで次のように告げる。「ゴルゴダ」との対比を示したい。

「クリストの死は事実上彼の予言者の天才を妄信した人々には——彼自身の中にエリヤを見た人々には余りに我々に近いものだつた。(略)彼等は唯その為にシヨツクを受けずにはゐなかつたのである。しかし年をとつた祭司たちはこのシヨツクに欺かれはしなかつたであらう。

『それ見たことか！』

彼等の言葉はイエルサレムからニユウヨウクや東京へも伝はつてゐる。イエルサレムを囲んだ橄欖の山々を最も散文的に飛び超えながら。」

芥川の位相は、明らかにゆらいでいる。クリストを「妄信した人々」は「我々」となり「彼等」となり、そういう人々のショックとは、「それ見たことか!」という「年をとつた祭司たち」には自明であった妄信の消滅であった。

一体芥川自身は、どこに属するといふのであろう。芥川の心情は、単にゆらいでいるだけではなく、二つに分断されたと見るべきであらう。自らに余りに近いクリストの死を悲しむと同時に、そういう自分を「それ見たことか!」と冷笑する芥川であった。こういう芥川の表現に対して、四福音書の場合は次の如くである。そこには、素朴にして清純な感銘があふれている。その中の二つを引こう。

「さて、昼の十二時から地上の全面が暗くなって、三時に及んだ。そして三時ごろに、イエスは大声で叫んで、『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言われた。(中略) イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた。すると見よ、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。また地震があり、岩が裂け、また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。(中略) 百卒長、および彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろのできごとを見て非常に恐れ、

『まことに、この人は神の子であった』と言った。」(『マタイによる福音書』第二十七章)

「時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及んだ。そして聖所の幕がまん中から裂けた。そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、『父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます』。こう言つてついに息を引きとられた。百卒長はこの有様を見て、神をあがめ、『ほんとうに、この人は正しい人であった』と言った。」(『ルカによる福音書』第二十三章)

「十字架の上のクリスト」をめぐる内奥の動揺を過ぎて、「西方の人」第三十五章「復活」に及んだとき芥川の筆は美しい定着を示した。そして第三十六章「クリストの一生、第三十七章「東方の人」の終結がくる。「続西方の人」では、「復活」を飛びこえて、第二十章「受難」に次いで第二十一章「文化的なクリスト」、第二十二章「貧しき人たちに」で芥川は筆を断つた。

「ルナンはクリストの復活を見たのをマグダレナのマリアの想像力の為にした。想像力の為に、――しかし彼女の想像力に飛躍を与へたものはクリストである。彼女

の子供を失つた母は度たび彼の復活を——彼の何かに生まれ變つたのを見てゐる。彼は或は大名になつたり、或は池の上の鴨になつたり、或は又蓮華になつたりした。けれどもクリストはマリアの外にも死後の彼自身を示してゐる。この事實はクリストを愛した人々のどの位多かつたかを現すものであらう。

既にクリストは、全く「人の子」であり、「天才」であつた。芥川の「復活」とは、そういうクリストへの後代の敬慕に他ならなかつた。作家芥川に即してそのことを言へば、彼の死後彼の作品がどのようにその生命を保ち得るかということに「復活」の問題の根元があつたにちがいない。このことには早くから、ある不安を感じ続けた芥川であつた。その作家的生を、常に古典との戦いに費した芥川にとつて、それは必然的な心情であつた。

「僕たちは、時代と場所との制限をうけない美があると信じたがつてゐる。僕たちのためにも、僕たちの尊敬する芸術家のためにも、さう信じて疑ひたくないと思つてゐる。しかし、それが、果してさうありたいばかりでなく、さうある事であらうか。

野呂松人形は、さうある事を否定する如く、木彫の白

い顔を、金の歩衝の上で、動かしてゐるのである。」これは、大正五年七月に書かれた短編「野呂松人形」の一節である。時に芥川は、數えて二十五歳であつた。

「彼は三日の後に復活した。が、肉體を失つた彼の世界を動かすには長い年月を必要とした。その為にも最も力のあつたのはクリストの天才を全身に感じたジャアナリストのパウロである。クリストを十字架にかけた彼等は何世紀かの流れ去るのにつれ、シエクスピアの復活を認めるやうにクリストの復活を認め出した。が、死後のクリストも流転を聞したことは確かである。あらゆるものを支配する流行はやはりクリストも支配して行つた。クララの愛したクリストはパスカルの尊んだクリストではない。」

時の流れの恐ろしさ、——「復活」を最終的に許すか、許さないかを決定するものは、時の流れであつた。「今」は、一度び去つて永遠にかえらない今であると同時に、「今」こそ、絶対に消失することのない永遠の「今」でもあるであらう。そのこと自体を決定するものも、その内にパウロの「今」を、パスカルの「今」をふくんだ時の流れであつた。そういう「今」に美的規範を見たからこそ、芥

川の美的ニヒリズムは成立し、その作家的晩照を彼に可能にしたのであった。「復活」の末章を引いてこの章を終ろう。私の後に残されたものは、芥川における、「クリストの一生」の終約、すなわち、「芥川竜之介の一生」の結着である。

「我々は唯茫茫とした人生の中に佇んでゐる。我々に

平和を与へるものは眠りの外にある訣はない。あらゆる自然主義者は外科医のやうに残酷にこの事実を解剖してゐる。しかし聖霊の子供たちはいつもかう云ふ人生の上
に何か美しいものを残して行つた。何か『永遠に超えようとするもの』を。」